

新・東の風

令和6年度
2月号

毎年「東中川連合」と「小路連合」の新年互礼会に出席させていただいています。去年は「東生野中学校の生徒はよくあいさつができると出席されていた地域の皆さんに言われ、とても嬉しかった」とこの紙面で紹介しました。今年の話は本校卒業生が全国高校ラグビー大会にたくさん出場していて、活躍していたことでした。なかでも優勝候補No.1と言われていた大阪桐蔭高校と関東での実力校桐蔭学園が準々決勝で対戦した試合が注目をあびていました。その内容が毎日新聞に大きく取り上げられていた記事を紹介します。

優勝候補同士の激戦の裏で、親友同士の負けられない戦いが繰り広げられていた。3日にあった準々決勝で、前回王者の桐蔭学園と昨春の選抜大会王者の大阪桐蔭のAシード校同士が顔をあわせた。両チームの「看板」を背負ったプライドがぶつかった。桐蔭学園のSO 丹羽雄丸(3年)は大阪府出身。子供の頃は生野ラグビースクール、大阪市立東生野中で実力を磨いた。東生野中出身で同学年の選手は大阪桐蔭にもいた。SHの川端隆馬だ。中学時代にハーフ団を組んでおり親交が深かった。丹羽はボールを継続して動かす桐蔭学園のラグビーにひかれ、高校進学時に地元を離れて神奈川へ。その後も二人は日ごろから連絡を取り合うなど関係は続いた。



【桐蔭学園－大阪桐蔭】後半、桐蔭学園の丹羽雄丸選手(右)にタックルをかわされる大阪桐蔭の川端隆馬選手＝東大阪市花園ラグビー場で
2025年1月3日、長澤凜太郎撮影

最上級生となった今季、先に注目を集めたのは川端だった。判断の良さと正確なパスで昨春の選抜大会、サニックスワールドユース交流大会の優勝に貢献。同時期の丹羽はケガもあり我慢の日々を過ごしていた。

「隆馬が選抜、サニックスと注目選手になっているのに、自分はケガをして、注目を浴びることもなかった。隆馬には負けたくない、同じ中学校の選手には負けたくない、という気持ちが強かった」。丹羽は当時の悔しさをそう振り返る。

今大会、両チームは初戦となった2回戦から順当に勝ち上がり、抽選の結果、準々決勝での対戦が決まった。川端はすぐに丹羽にメッセージを送った。「よろしくな。絶対俺らが勝つぜ」

3日に二人は花園ラグビー場のグラウンドに立った。ごくわずかな時間でも、目が合う瞬間があった。川端は「とてもワクワクというか、絶対に負けへんっていう思いになった」と気持ちが高ぶった。

開始10秒あまりで先制トライを挙げたのは大阪桐蔭だった。さらに3分後には川端がトライを決めた。前半は大阪桐蔭が優勢だった。後半は一転して桐蔭学園が攻勢を強める。その中心にいたのが、後半4分に反撃のトライを自ら奪い、その後も司令塔として得点につながるキックパスを次々繰り出した丹羽だった。試合は26対14で桐蔭学園が制した。司令塔として躍動し、歓喜の輪の中心に立った丹羽。試合終了のあいさつを終えると、川端と互いに歩み寄り、力強く手を握り合った。

「絶対に優勝してな」。川端の言葉に丹羽は「俺らが優勝するから」と力強く答えた。「多くの友人がいる相手に勝った。また負けられない理由ができました」

親友でありライバルでもある存在から思いを託され、連覇への思いを強くした。